

# 令和5年度 わかふじ幼稚園 自己評価報告書・学校評価報告書

2023年12月21日  
わかふじ幼稚園

## 1. 本園の教育目標

健康で、明るく、素直な、なんでも一生懸命に頑張る子を育成する

指導方針：

『幼稚園教育要領（文部科学省）』に準拠すると共に、次の事項を重視した指導をめざす

- ・園児が遊んで取り組めるような雰囲気や環境づくりをする
- ・いろいろなことをやってみようという意欲を持てるようにする
- ・仲良く、ともに喜び合う気持ちを持てるようにする
- ・小さな発達を大切にし、根気よく繰り返し指導する

## 2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

2023年度年間目標：クラスをこえた友だちとの関わりを大切にしよう

- ・他のクラスや先生にも自分から挨拶をしよう
- ・どの学年の子でも名前呼び合える友だちになろう

2023年度クラス目標：

年少 明るくのびのびと園生活を過ごし、友だちと遊んだり、活動したりすることを喜ぶ

年中 遊びを通して自己を発揮し、友だちと関わりながら相手の気持ちに気づき、受け入れられるようになる／身近な社会や自然の事象に興味・関心をもち、意欲的に関わって、経験を深める

年長 友だちと一緒に園生活を十分に楽しみ、意欲的に遊びや生活に取り組むと共に、主体的に行動して充実感を味わう

## 3. 評価の経過

2023年1月	2023年度年間予定の検討／2023年度自己評価課題設定
2023年2月	それぞれのクラスごとに2022年度年間指導計画ふりかえりを実施
2023年5月	それぞれのクラスに応じた年間指導計画の立案
2023年8月	年間指導計画の1学期ふりかえりに基づき2・3学期指導計画の再構築
2023年11月	「園生活ふりかえり」保護者アンケート実施／2023年度自己評価実施
2023年12月	2023年度自己評価点検評価会議、自己評価報告書の作成 学校関係者評価委員会開催、学校評価報告書の作成

## 4. 評価項目の達成および取り組み状況

今年度の自己評価は、前年度に教職員から提起された課題を取り上げた。評価指標は「教育目標・教育方針」4項目、「教育課程・指導計画」4項目、「教育環境」3項目、「教育の内容・方法」2項目、「教師の役割・資質向上」5項目、「子育て支援」4項目、「地域住民や関係機関との連携」3項目、「運営管理」1項目であった。

各教職員は、各指標につき、それぞれの評価項目が達成されているかどうかの段階評価（4段階評価）、およびその評価結果の根拠・理由になる取り組み現状、改善を要する点や課題を記述した。各教職員が自己点検評価をした結果を点検評価会議で総括し、評価項目における達成、園の取り組み状況について、評価レベルの判断をした。また教職員の記述より抜粋した内容を、「評価指標の達成および取り組み状況表」に示した。

A 十分達成されている／B 達成されている／C 取り組まれているが、成果が十分ではない D 取り組みが不十分である

評価指標	取り組み課題	取り組み状況	評価
教育方針	①今後も話し合いを重ね、教育目標や教育方針の解釈や考え方について教職員間で共有していく ②園の良さを生かした保育を考えていく ③教育目標をクラスに掲示するなど意識づけていく ④研修で学んだことを各教職員の裁量で取り入れて保育をしているが、クラスごとに解釈の違いが生じないよう、園として足並みをそろえて教育計画を進める	・年間指導計画に「園の教育目標と指導方針」欄を設け、週案に「月間目標」欄を設け、これらを保育日誌と同じファイルに入れて、常に照合できる状態にした。 ・年間指導計画は学期ごとに見直し、月間目標や週案は毎週ふりかえりをし、教職員間で共有した。 ・保育に関する疑問や検討事項は、毎日の申合わせ会議、また月2回の定例職員会議で取り上げた。 ・園の良さとしては、①小規模園ならではの「教職員が全園児の様子をある程度把握できている」状態は、日常の園児への関わりに活かしている。②園バスがなく、保護者による送迎での登降園なので、9時からクラス活動が可能となり、午前中に静と動の活動に十分な時間を確保できる。③1学年1クラスなので、担任が取り組みたい保育の提案がスピーディに実現しやすいため、などがあげられた。 ・各教員が年間を通して、積極的に研修に参加し、その学びを報告し教職員間で共有した。	A
指導課程	①園全体で体力向上プログラムに取り組む ②園外保育で地域の公園に行くなど、湘南の地域で海を感じられるような園外活動もあってよい ③子ども主体の保育を意識した指導計画を引き続き検討していく	・3年間を通した体力向上プログラムを作成し実施した。子ども達の能力に合わせて活動が構成されていたので、得意な子ども、苦手な子どもも意欲を持って前向きに取り組んでいる。年間を通して、各年齢ごとの取り組みを積極的に展開した。これまで遊びの中で使用していた鉄棒も、プログラムの一環として段階を踏んで指導を繰り返し、技の幅を広げた。園外保育や、園庭自由遊びで、自主的に鉄棒や縄跳びをするなど、子ども主体の遊びを通した保育につながっている。 ・年中長は電車利用も含め、園外保育を積極的に行なった。道路の歩き方、横断歩道の渡り方など歩行者マナーが繰り返しの経験で身についた。 ・年長は、発表会の劇の背景画や小道具、運動会入場門など、グループ製作の経験を積み重ね、話し合いながら自分たちが考えていたものを仲間と創る経験を重ねた。3学期はグループ活動を多く行なう。 ・年少は、1学期より、楽器遊びや歌などじっくり音楽に親しみ楽しんできた。楽器遊びは発表会の合奏の成果につながった。2学期後半より、仲間とイメージを共有する遊びが広がるよう配慮した。	A
教育環境	①気軽に一緒に遊べるよう異年齢交流に力を入れる ②子ども達の小さな変化を見逃さずに家庭との連携を図る ③保護者との関わりを大切にしていきたい	・プレ保育の時間帯に2学年異年齢保育を行なっている。園外保育に異年齢でできることもあった。 ・異年齢交流では、低年齢児は、上のクラスの子どもの活動に刺激を受け遊びの幅が広がっている。年齢の高い子どもは教えたり、譲ったりする姿がみられる。 ・保育室でカタツムリ、メダカ飼育、プランターで野菜（きゅうり／えだまめ／レタス／トマト／ブロッコリー／さつまいも／かぶ）を栽培し、試食した。春に咲くチューリップの球根を植えた。和木綿を栽培、収穫し、綿と種を分けた。今後、綿を「よりこ巻」にして木綿糸作り染色を経験する。 ・降園時に、保護者にその日の保育内容を伝え、小さなことでも話をする環境を心がけている。クラス便り、出席帳メッセージ、メール配信、また個別には電話、面談を取り入れている。	B
教育方法・内容	① 描画や製作など、子どもが意欲的に取り組み、子ども自身の達成感につながるようにする ②想像力を広げ、想像力が深まるような保育の広がりや日常の様々な経験をつながけていきたい	・子どもが描画、造形、製作に意欲的に取り組めるよう、必要な時は個別に丁寧に関わる。 ・年少では、当初、少人数対応、個別対応での活動が多く、2学期になってクラス全体での活動が入れている。子どもへの声のかけ方、説明の仕方、導入や終わり方などを常に意識して関わるよう努めた。 ・年中では、自ら活動に意欲が向くような力がつくよう心がけた。子ども自身が楽しかったこと、経験したことは、気持ちが入りやすいので想像を広げて描きやすいようで、活き活きと描いていた。 ・年長は、体験したことの絵は成長とともに上達し、友だちの絵を見てより想像力が深まってきている。年間を通した廃材遊びで、自分達で考え遊ぶ姿に対し、担任は見守り、時に声をかけている。	A
教員の役割・向上	①一人一人の幼児をよく観察するように心がけている ②子どもの人権に配慮した関わりができていく ③その場にふさわしい言葉遣いができる ④研修に行った先生の研修内容は教職員で共有している ⑤保護者との信頼関係をもてるよう努める	・少人数保育を生かし、一人一人をよく観察し、その子に合わせた対応を心がけた。 ・研修内容は、必ず会議で報告し共有している。 ・複数担任の連携では、両者の意見を調整して保育を行ない、保護者対応するなど心がけた。 ・子どもの人権関連意識アンケートにより、子どもへの不適切な関わりはないか自己チェックをした。 ・子どものプライベートゾーン、着脱、水遊びでの大人の配慮などについて共通理解が必要とされた。 ・子ども理解に向けて、保護者との情報交換により、相互理解を深め信頼関係が深まったと感じた。	B
子育て支援	①プレ保育（ばんび）では、参加者に即した企画や運営を行なっている ②プレ保育で保護者の子育ての悩みや相談を受ける ③特別な配慮を必要とする幼児に、理解を深め、必要な対応を行なっている ④必要に応じて他機関と連携を行なう	・プレ保育では、自由遊び、親子活動、紙芝居、サークルタイムの流れで年間プログラムを構成し、年間を通した主担当が総合的に把握できるようにしている。 ・プレ保育で、子どもの気がかりなどの相談に応じている。また希望者の相談に別途対応している。 ・元気な子に合わせて動く活動が多かったが、作って遊ぶのテーマも入れた方が良かった。 ・プレ保育では、幼稚園に入園したときの成長ビジョンを保護者に発信できたかどうか問われた。 ・特別な配慮を必要とする児については、必要に応じて両保護者面談をし、園や家庭での状況を共有し、対応についての共通理解を図っている。 ・保護者同意のもと、相談機関、療育機関の情報を共有し、必要な場合は見学や意見交換をした。	A
地域住民との連携	①地域の人々と親しく挨拶ができる（園外保育） ②地域の小学校の児童との交流・学校見学・教員による授業参観を行なう ③幼小接続を推進する	・園外保育での外出時は、近隣住民、施設職員への挨拶が自然に出るようになった。 ・1学期は、保幼小連携会議にて本年度の交流について意見交換した。小学校授業参観に新旧年長担任が参加し、幼小の育ちについて意見交換した。小学2年生を夏期保育中に招き、小学生と年長児交流をした。2学期は、年長児が小学校訪問をし、1年生とクラフトやゲームで交流をした。3学期は年長児の学校訪問、園の作品展に小学校教員を招待し、造形教育などの意見交換を予定。 ・園の体力向上プログラム推進のため、教員が小学校の体育授業を複数回、見学し、体力向上指導について教員相互に意見交換をした。 ・新型コロナウイルス感染症が5類感染症となり、活動の制限が緩和したこともあり、幼小連携は、総じて大きく進展した。	A
運営管理	①新園舎および園庭整備後の環境に対応した、消防計画、災害や事故報告書の作成を行なう	・園内の会議・情報共有システムのペーパーレス化、家庭への情報発信のペーパーレス化に切り替えた。 ・これまでに園で作成した「防災管理マニュアル」、「安全管理マニュアル」、「事故発生防止マニュアル」を整理統合し「危機管理マニュアル」を策定した。このマニュアルは、全ての教職員が火災、災害、事故、事件などのあらゆる危機に対し、的確かつ迅速に対応し、予防するために必要な事項を定めた。新たに年間の学校安全計画を作成し、実施した。	A

## 5. 総合的な自己評価結果

新型コロナウイルス感染症が2023年5月に5類に移行したことに伴い、活動制限が緩和されたことは、園が当年度設定した自己評価課題達成の一助となった。また活動制限中に行なわれた保育の見直しや改善は、4年ぶりにコロナ前の活動状況を取り戻した現在においても継続していくこととなった。

取組み課題の到達度については、「十分達成されている」というA評価だったのが、「教育目標・教育方針」、「教育課程・指導計画」、「教育の内容・方法」、「子育て支援」、「地域住民や関係機関との連携」、「運営管理」という6指標であった。これらの中から、今後、新たに取り組むべき課題がみいだされた。

また、「達成されている」というB評価だったのが、「教育環境」、「教師の役割・資質向上」という2指標であった。これらの中には、今後、年間を通しての活動の位置づけを検討する必要性も指摘された。

## 6. 学校評価保護者アンケート

学校評価保護者アンケートとして「園生活ふりかえり」アンケート（2023年11月Web調査）を実施した。設問は「お子さんについて（4問）」「園からの情報発信について（5問）」「教育内容について（10問）」の計19問であった。回答形式は4択（そう思う／ややそう思う／あまり思わない／まったくそう思わない）であった。このほかに任意で自由記述を求めた。回収率は93%であり、全ての項目に欠損がなく有効回答だった。回答者のうち61.5%から自由記述がなされた。

各回答に1点～4点を付与し得点の高いほうが、「そう思う」程度が高くなるように数値化した。項目ごとに平均値、標準偏差（SD）、最大値、最小値を表に示した。また教職員に対しても、同様のアンケートを実施して「保護者はどのようにとらえていると思われるか」という視点から回答を求め、表に平均値を併記した。

園生活ふりかえりアンケート（質問項目）	保護者				教職員
	平均	SD	最大値	最小値	平均
お子さんは、幼稚園生活を楽しんでいる	4.0	0.1	4	3	3.8
お子さんは、遊びや生活の中で決まりを知り、守ろうとする態度が育ってきている	3.6	0.6	4	2	3.8
お子さんは、園でしたことを家でもやったり、話したりする	3.5	0.7	4	1	3.8
お子さんは、その発達なりに、良いこと・悪いことの判断をするようになってきている	3.7	0.4	4	3	3.5
園でのお子さんの様子は、行事、参観、クラス便りなどで知ることができる	3.6	0.5	4	2	3.7
園は教育目標、保育の方針、内容について伝えている	3.7	0.5	4	3	3.5
園は、保護者と協力しながらお子さんを教育している	3.8	0.5	4	2	3.7
園は、お子さんの様子についての相談や連絡に適切に対応している	3.6	0.6	4	2	3.8
園は、お子さんのケガや、何かが起きた時など、分かりやすく状況を伝えている	3.6	0.6	4	2	3.9
園は、お子さんの発達に応じた経験ができるように配慮している	3.7	0.5	4	2	3.6
園は、ひとり一人を理解し、個性に応じた対応している	3.5	0.6	4	2	3.4
園では、教職員同士が協力して活動している	3.7	0.5	4	2	3.4
園は、来園時や電話などの際には、親切・丁寧に対応している	3.9	0.4	4	2	3.6
園は、健康作りや体力作りを進めている	3.9	0.2	4	3	3.8
園は、身近な自然や社会と関わるように配慮している	3.9	0.3	4	3	3.7
園は、人と関わる力が育つように配慮している	3.7	0.5	4	2	3.4
園は、お子さんが表現を楽しみ、表現する意欲を発揮することができるように配慮している	3.8	0.4	4	2	3.7
園は避難訓練や安全指導（交通安全など）で、お子さんが安全に対する意識や習慣が身につくように配慮している	3.8	0.5	4	2	3.7
園は、栽培物などで、園児の食育を育てている	3.8	0.4	4	3	3.7
	3.7	0.5			

「園生活ふりかえり保護者アンケート」結果は、各項目で平均3.5～4.0という高評価を得た。設問内容では「お子さんについて」の平均値は3.7、「園からの情報発信について」の平均値は3.7、「教育内容について」の

平均値は3.7だった。また自由記述（任意）では、子どもの成長や発達に感謝の思いが記述された。一方、園への要望や提案も記述され、これらについての具体的対応を随時、進めていきたい。

保護者から寄せられた回答は、教職員自身が行なった自己評価を客観的に捉え直すことにつながり、幼児の育ちを支える保育の質の向上のために、園が家庭と共通理解を深めていくための貴重な機会となった。教職員については、主に教育時間に従事する者と、主に預かり保育に従事する者で、園児や保護者との関わる機会が異なるが、保育に関する共通理解を深めていけるようにしたい。

## 7. 今後の取り組み課題

### 「教育目標・教育方針」

- ・園の良さを生かした保育を引き続き具体的に考え実現していく。
- ・幼稚園の魅力が、外部の方にも伝わるようにさまざまな情報発信を試行していく。
- ・子ども主体の保育について、園として足並みをそろえて教育計画を進めていくことを大切にしたい。

### 「教育課程・指導計画」

- ・体力向上プログラム、園外保育について、今年みられた活動の広がりを踏まえ、年少での地域の自然に親しむ園外保育を検討していく。年少、年中、年長の切れ目のない取り組みを具体化する。
- ・子ども主体の保育の展開について、年間を通した指導計画を、それぞれの年齢に即して積極的に取り組んでいく必要がある。
- ・子どもが育つ環境や保育を巡る状況は変化しており、保育ニーズにあった保育を行なうため、歴史ある園の良いところは残しつつ、今後も新しいことを取り入れていく。そのためには保育の意義を明確にして、教職員の保育観を共有していく。

### 「教育環境」

- ・異年齢交流は、日常保育の機会利用スタイルで、取り組む方向で進めていく。

### 「教育の内容・方法」

- ・子どもが意欲的に取り組み、子ども自身の達成感につながる活動実践を教員相互に共有するよう努める。

### 「教師の役割・資質の向上」

- ・3年間を通して幼児期の体力向上、運動遊びへの取り組みは、重点的保育計画として継続する。
- ・日常的に預かり保育利用児の保護者とは、担任からクラス活動について聞く機会が少ない。特に年少児の場合に教職員から園の活動を積極的に伝えていく方法を探す。

### 「子育て支援」

- ・子どもの年間をとおした健康維持について、家庭との情報共有と協力のあり方を進める。
- ・保護者と一緒に育てていく意識をこれまで以上に高め、保護者が園に相談しやすい状況を継続的に整える。

### 「地域住民や関係機関との連携」

- ・幼小接続事業、地域へのアウトリーチなど、継続的に実施する。

### 「運営管理」

- ・園運営に関する書類の見直し、点検を行なう。
- ・ペーパーレス化への移行2年目となり、業務効率のメリット、デメリットを見直す。

## 8. 学校関係者評価委員会の評価

### 1) 小規模園ならではの良さが活かしている。

子ども一人一人が見えやすく、教職員の見守り、保護者の安心など皆で育てている点が評価される。小規模園で小回りがきくため、前向きな保育の取組みなどがストレートに現実化する柔軟性が高い。

2) 教職員の意欲・モチベーションが高い。

毎月複数回の園外保育を継続的に確保し、体力向上の園全体の新しい取り組みなどは、園内連携と教職員のモチベーションの高さが伝わってくる。

3) 保護者にとっては、怪我と園からの連絡が気になる。

アンケートからは、保護者にとっては、怪我と園からの連絡が気になる点だと読み取れる。今後の取り組み課題に含まれているので期待したい。降園時刻の都合で、普段の様子が見られない保護者に対しての日常の情報発信も求められている。